短歌同人誌『碧落』一九六〇年一月号

インドの哀愁

矢口　新

昨秋文化交流のため日本青年団の代表が東南アジア各国を訪問した。矢口さんはその団長として重責を果たされた。

ニューデリーの市街は美しい。この都会には構想された美しさがある。緑がまた実にゆたかでそれが整然とした都市区画に誠によく調和して、なごやかさをかもし出している．東京でいえば、市街全体が宮城前のようだと思って間違いない。あれよりもっと、ゆたかさがある。

この美しい都市は、もちろんイギリス人のつくったものである。イギリス人は、インド人の住むオールド・デリーとは全然別に白紙に地図を描くようにニューデリーを建設したのであろう。オールドデリーはインドの街であるが、ここはみじめというより一種の凄さをもっている。われわれ異国人はとても歩けない街通りである。悪臭、乞食、人ごみ、はだか、らい病患者。

この二つの都市が、となりあわせていることが、われわれに妙なかなしみをもたせる。東京のバタヤ部落の物凄く大きいのがあるわけであろう。否、インドの大部分が、実はそうなのであろう。

イギリスの植民政策は、現地住民の生活にはあまり関与しないという方針であったということは有名なことだが、これ程迄に、インドの民衆の生活と無関係に、自分たちだけの政策を実行出来たのであろうか。イギリスは、自分の欲するものだけをインドから惜しみなく奪いとったあとは、出来るだけインドからはなれようとしたのではないだろうか。

ニュ―デリーから、二〇〇キロ程南に、アグラというところがある。ここには、例の有名なモガール帝国の遺跡がある。アグラ・フォルトという城のあと、タジマハールという墓、ファテプールシクリーという城址など、如何にもモンゴールの騎馬民族らしいものを残している。

インドの大平原のなかに、ぽつんとこの壮大な遺跡が残されている。それは十七世紀のニューデリーではなかったか。今はもとよりだが、昔でもやはり周囲のインドの民衆の生活とは、何の関係もないものらしく見える。この壮大なモニュメントが、インドのものらしく見えないのは、私の目が悪いからだろうか。

ところで、このアグラとニューデリーとをつなぐ道路がまたすばらしい。ハイヤーで四時間かかる所だが、八〇キロ位でぐんぐんとばしても、ゆれない道である。

私はその道路をとばしている間に、妙なことを感じた。それは、この道路が、ただ一筋、二つの地点を結びつけているだけであって、途中に、わずかに一、二か所のタウンがあるほかは、部落らしいものが全然みられないことである。それはインドの広さを示すものかも知れない。しかし、道の両側はずっと耕された畑であった。インドの農民は、この道の両側の土地で耕作していることは確かである。見ると彼等の生居は、遥か水平線のかなたに時々見えることがある。それらの部落とこのアグラ、ニュ―デリールートとは全く関係がないかの如くに見える。

そう思ってみると、この道路には、これと交叉する道路、これから岐れて横へ行く道路が全然ないことがまた実にはっきりしている。まことにただ一筋、アグラへ向っているルートである。この近代的道路は、ニューデリー、アグラフォルトとおなじく、やはり民衆の生活とは別なものであるらしい。

インドの文化とは何であろうか。私は、古代文化の宗教的思想以外に、ふれることが出来なかったのである。

現代インドを表現する言葉に、壮大なるモニュメント・そして飢餓の民というのがある。これは実は、数年前、パリーのユネスコの会議に出席した時、聞かされた言葉である、従来ヨーロッパ人は、インドを評するにこのようなきまり文句を使っていたが、そういう言い方で、果して本当のインドがわかるだろうか。改める必要があるのではないかというようなことが話し合われた。

私は、この言葉の意味の悲しさを、今度のインド旅行ではじめて味わったような気がした。

（国立教育研究所員・教育学）